特別講演

「武道と人づくり」

講　師

東海大学理事・副学長
ＮＰＯ法人柔道教育ソリダリティー理事長
山　下　泰　裕

北海道庁旧本庁舎 赤レンガ（札幌市 中央区）

特別講演　「武道と人づくり」

ＮＰＯ法人柔道教育ソリダリティー理事長
東海大学理事・副学長　**山　下　泰　裕**

山下泰裕先生のご紹介をさせていただきます。

山下先生は昭和32年，熊本でお生まれになり，幼少期虚弱だったことから柔道を始められましたが，東海大学２年生の年に全日本選手権で優勝を果たし，怪童から怪物と呼ばれるようになりました。無敵伝説の始まりでもあり，同大会を９連覇。そして，その勢いで59年，ロサンゼルスオリンピックでは，対戦中に肉離れを起こしながらも勝ち続け，金メダリストになるという素晴らしい業績をあげられました。日本人にとってはエジプトのモハメド・ラシュワン選手との対戦は忘れられない名勝負，名場面だったのではないでしょうか。

その後，いろいろな分野で活躍され，現在は東海大学理事副学長，体育学部長の要職に就任され，また柔道を通じた国際交流にも精力的に取り組んでいらっしゃいます。

私たちは，教育現場において，遊びや体力づくりから，心づくり学びづくりへと絶えず考えている中，本日の演題「武道と心づくり」を山下先生からいただきました。それでは山下先生，どうぞよろしくお願いいたします。

ただいまご紹介いただきました，東海大学，柔道の山下でございます。

全国学校体育研究大会北海道大会の特別講師としてお招きいただいたこと，大変光栄に思っております。そしてまた，大会のためにご準備されてこられた関係者の方々のご尽力に，心から敬意を表したいと思います。

今日は，「武道と人づくり」という演題でお話をさせていただきますが，主として私の体験を通した話をさせていただきたいと思っております。私の話の中心は柔道ですが，これは武道全般，あるいはスポーツ全体そのままにあてはまることと思っております。少しばかり写真も準備してきましたので，これを用いながら話を進めさせていただきたいと思います。

まず，１枚目の写真ですが，これは私が保育園時代に同い年の同級生と一緒にバスの前で撮ったものですが，どこに私がいるかわかりますよね。真ん中にいるのが私ですが，実は私だけが台の上に乗っているのではないのです。いかに小さい頃から大きかったかということです。体が大きいだけではありません。非常に元気がありました。元気があり過ぎました。このあり過ぎた元気・エネルギーが悪い方にいって，実は私は小さい頃から大変な問題児でした。

これは今から28年前にロサンゼルスオリンピックで優勝して，郷里・熊本に帰ったときに小学

校時代の同級生が集まってくれまして，お祝いの会を開いてくれた時の写真です。そのお祝いの会で友人たちにもらった記念が，この表彰状でございます。ちょっと，読んでみます。

「表彰状　山下泰裕殿。あなたは小学校時代，その比類稀なる体をもてあまし，ケンカをして相手を泣かせたり，教室で暴れたりして，我々同級生に多大な迷惑をかけました。しかし，先のロサンゼルスオリンピックにおいては，我々同級生の期待を裏切るまいと，持ち前の闘魂を発揮し，不慮の怪我にも関わらず，堂々と金メダルに輝かれました。このことは，小学校時代の数々の悪行を精算して余りあるどころか，我々同級生の誇りとするところであります。よってここに表彰し，偉大なるやっちゃんに対し，最大の敬意を払うとともに，永遠なる友情を約束するものであります。」

当時いかに私が悪かったか，この表彰状がその全てを表していると思います。

私が柔道を始めたのは小学校４年生の時ですが，４年生に上がる前に学校で大きな問題が起きました。なんと，私のクラスメイトの中に学校に行けなくなった子が出てきて，いろいろ調べたら，その子は「やっちゃんが怖い。やっちゃんが怖くて学校に行けない。」ということでした。これがきっかけで両親は私に柔道を勧めました。「このままいったらうちの息子は将来，人様から後ろ指をさされるような人間になってしまうのではないか。」と心配したのです。

我が家で柔道，あるいは武道の経験者は１人もいません。でも，両親の頭の中には，「柔道っていうのは，武道っていうのは，もっと大きく言いますと，スポーツっていうのは，単に勝ち負けを競うだけじゃない。その技術・体力を磨き高めるだけでもない。人間を育み，育ててくれるものではないか。柔道をやらせたら，少しは周りに迷惑をかけない子どもになってくれるのではないか。」こんな期待があったようです。

激しいスポーツである柔道。私は，柔道に惹かれ，夢中になりました。何と言っても，教室で暴れると，物を壊したり仲間に怪我させたりするわけです。でも柔道場だったら，先生の指示に従ってルールを守ってやれば，いくら暴れても，暴れまわっても，誰からも叱られることはない。柔道は，私の有り余ったエネルギー・闘争心を存分に満たしてくれたのです。

話は変わりますけど，私は，意外に思われるかもしれませんが，過去を振り返るのは好きではありません。どんなに頑張ったって自分の過去を変えることはできない。そして，私の見ているスポーツの世界の範囲では，過去を大事にしてる人ほど，今があまり輝いていないような気がしてならないのです。私は，過去の栄光に生きる人間ではなくて，今に生きる，あるいはこれからに生きる，そんな人間でいたいと思っております。

私は現在55歳です。ロスのオリンピックで優勝したときが27歳でした。三段跳びに例えると，あのオリンピックで優勝するまでが私のホップであり，去年までがステップ。そして，55歳のこれからが俺の本番，ジャンプなんだと思っています。いくつになっても前を向いて，夢や理想に向かって現実を直視しながら歩いていきたいという思いで生きております。

そんなことからも，私の目に着くところには，一切過去の栄光の品々というものはないんですが，たった１つの例外がこの表彰状ということになります。我が家の小さな書斎の入口にこれを掛けております。

これを見ると，小学校時代の同級生の顔が浮かんできます。私の生まれ育った九州山地の近くにある，山や川が浮かんできます。童心に戻れるような気がしますし，小学校時代の同級生の「やっちゃん頑張れよ！俺達も頑張るからな！」そんな声が聞こえてくるような気がするんです。いくつになっても前を向いて，この瞬間を大事にして生きていきたいなあと思っております。

私はこれまでを振り返って，非常に恵まれた人生を歩んできたと思っております。特に人との出会いに恵まれました。今，写っておりますのは，私の柔道の二人の恩師でございます。中学・高校時代の恩師が向かって左側の白石礼介先生。そして右側が，高校途中から現役を引退するまでずっとご指導いただいた佐藤宣践先生です。二人とも日本では指折りの柔道の指導者でした。しかし，二人に共通していたのは，「単に柔道のチャンピオンづくりを目指すのではない。人生のチャンピオンづくりを目指すのだ。柔道は人づくりである。人間教育である。」このあたりが，指導者としてのすごい実績を残されながらも一番大事にされていた部分であったと思うのです。この二人の先生の情熱・愛情を存分にいただいた私は，柔道選手としてすくすくと順調に成長していきました。

白石先生のもとで，熊本から日本へ。佐藤先生のもとで，日本から世界へ。私自身は羽ばたいていくことができました。今日は，中学校時代の白石先生から学んだことを，少しお話しさせていただきたいと思っています。

私が進んだ中学校は，私が入ったときには９年間公式戦無敗。私が中学１年から３年まで全国中学生柔道大会３連覇というすごいチームでした。そこを率いるのが白石先生でした。先生が教えられたのは，試合で勝つための技術・体力・戦術だけではなかったのです。柔道家や人間としての生き方・在り方・心構えを我々に繰り返し繰り返し話されていました。

私は，先ほどのように小学校時代までは本当に問題児でした。生意気で親の言うことも聞きやしなかった。しかし，柔道だけは好きだったのです。この恩師から，勝ち負けだけの柔道じゃない，人づくり・人間教育の柔道を繰り返し繰り返し指導を受けて，このことが私の頭のてっぺんから体に染み渡るように入っていき，私自身が変わっていったような気がしています。

先生の教えで，特に心に残っている一つは，「ええか，皆が目指すのは，単に柔道のチャンピオンじゃないぞ。皆が柔道を通して学んできたこと，例えば，目標に向かって頑張ること。誰よりも努力すること。失敗しても失敗しても立ち上がって向かっていくこと。仲間と力を合わせること。ルールを守ること。辛抱すること。あるいは，弱い人には手を差し向けること。闘った相手を尊重すること。こういったことは柔道だけじゃない。普段の生活，あるいは人生でも大事にしていかなければいけないことなのだ。柔道を通して学んだこと，これを日常生活や人生で生かすことが大事なんだ。どんなに柔道で頑張ってチャンピオンになったとしても，精一杯頑張っても，30前後で現役は終わる。そういうことをしっかり学んで実践していけなかったら，柔道ではチャンピオンになれても，人生のチャンピオンにはなれない。この30名くらいいる部員の中で，１人でもそういう柔道チャンピオンが出ればいいけれど，例え柔道のチャンピオンが出なくても，そういう意識で中学校生活を送り，一生懸命柔道に勉強に普段の生活に励んでいけば，皆が人生のチャンピオンにはなれるはずだ。大事なことは柔道を通して学んだことを普段の生活，あるいは人生で生かしていくことなんだよ。そして，人生のチャンピオンになるためには，勉強も大事にしていかなければいけないんだよ。」そんな話をよくされたことをしっかり覚えています。

面白いものです。それ以降の私は，中学・高校・大学時代も授業を受けるときには一番前の最前列に座って授業を受けるようになりました。その習慣は50近くまで続きました。全日本中の監督をしている当時は，私だけではなく柔道チームのコーチングスタッフ・サポートスタッフ皆が，一番前の席でいろんな勉強会・講習会等を聞いていたものです。ちょっとにぶいものですから気付かなかったのですが，一番前の最前列の真ん中に私が座っていると，講師の人が非常にプレッシャーを感じて，講師の人のリズムを崩してしまうということに，50歳になって気付くようになりました。今は決して，最前列の真ん中には座りません。前から３分の１くらいの，右か左の端の席に座るように心掛けております。何が言いたいのかというと，中学生時代の教えというのは，その後に大きな影響を与えるということです。素晴らしい指導者との出会いが，私にそういう習慣をつけさせ，人生を変えたのでした。

もうひとつ，先生の教えとしまして，「皆，柔道強くなりたいか。だったらまず最初に心掛けることは，自分のことを思いアドバイスしてくれる人の話を素直に聞ける人間になることだ。ええか。俺の話だけじゃないぞ。お父さん，お母さん，先輩，いろんな人の話だぞ。時には厳しい話もあるだろう。しかし，自分を思って言ってくれる人の話を素直に聞くこと。これが強くなるために一番大事なことだよ。」これは何度も話されていたことでした。

我々は普段，「強くなるためには人一倍の努力だ。目標を明確にもつことだ。やらされる稽古ではなくて，自分から進んでやることだ。自分で考えて，創意工夫を発揮していくことだ。」と，こんなことを話します。どれも大事だと思いますが，今私が柔道選手が強くなるために何が一番大事かと言われたら，おそらく私は恩師と同じ答えをします。「皆のことを思ってくれる人の話を素直に聞ける人間になれ。」と。

そして現在55歳，東海大学で体育学部長や副学長を務めておりますが，大人になればなるほど，子ども時代よりも，この精神というものがより大切になってくるのではないかと感じております。

併せて，先生はこんな話もされました。「柔道の試合会場に行ってみろ。高校生，大学生，警察官，社会人，ちょっと『俺は偉い』と勘違いしている連中が，偉そうに肩を怒らせて歩いているだろう。ええか。彼らは一流じゃないからな。自分の強さをそうやって人前でひけらかし示そうとする。そんなのは本物じゃない。二流，三流だ。決して，あんな柔道家にだけにはなってほしくない。強くなればなるほど，謙虚さが必要なんだ。そして本当の強さをもった人間っていうのは，相手の痛みがわかるものだ。強くなればなるほど，優しくなれるんだぞ。ならなきゃいけないんだぞ。」と。この教えも非常に心に残っております。

現役時代の私は，相手の選手から見たら鬼みたいな選手として，相手の選手の夢を全部潰していく選手でした。現役終わって27年，全日本の監督が終わってからも12年経ちました。闘うことは止めたいと思って，この12年間を生きてきました。むしろ私が目指したのは，「私の体全体から優しさが滲み溢れるような人間になりたい。」という思いです。

強くなればなるほど，優しくなれる。これからも，この恩師の教えを大事にしながら，併せて，少しでも傲慢にならずに，謙虚に誰からでも学ぼうという姿勢を大事にしながら，教育者として

のこれからの人生を歩んでいきたいと思っております。

この写真は私が大学２年生，当時19歳史上最年少で全日本柔道選手権で優勝したときの写真です。向かって左側が，私の祖父でございます。右側が，東海大学創設者，松前重義先生です。松前先生は私と同じ，熊本のご出身でした。若いときに，柔道を通して心身を磨き高めたことが自分の人生の土台をつくったとして，東海大学・学園を通してスポーツを非常に奨励してきたのです。

同じ熊本出身であり若い頃柔道をやっていたということで，松前先生は私を非常に応援してくれました。亡くなられた後，関係者の方から聞きますと，「山下君，松前先生は君をじつの孫のように思っていたんだよ。」こんな話も聞きました。先生は私をいつも，チャンスがあれば自分の近いところに置いていろんなことを学ばせようとしていたようでした。そんな先生の行動，あるいは発言を身近で感じながら，私自身も人生をいかに生きるべきか，人間はいかにあるべきかといったことを真剣に考えるようになっていきました。

先生は亡くなられる前に，何回か私を呼ばれ，こんな話もされました。「山下君，僕は君を真剣に応援してきた。僕はなんで君をこうやって真剣に応援してきたかわかるか。試合で勝ってほしい。もちろんこれもあった。しかしそれだけじゃないぞ。君には日本で生まれ育った柔道を通して，世界の若人と友好親善を深めてほしい。いや，それだけじゃない。君には将来，スポーツを通して世界平和に貢献できる人間になってほしい。だから僕は君をこうやって応援してきたんだよ。わかるか。わかってくれるか。」

何度かそんな話をされました。頭ではわかります。しかし，私に何が出来るのでしょうか。何も見えませんでした。しかし，時間がありましたら後ほどお話したいと思っていますが，2006年からＮＰＯ法人を立ち上げました。様々な国際交流も展開し始め，先生の世界に一歩でも踏み出したことになるのでしょうか。

28年前のロスのオリンピックの決勝でございます。足を怪我した私にとって，大変苦しい戦いでありましたが，実はこのロスのオリンピックの決勝は，逆に大変幸運な戦いだったのです。下になって一生懸命逃げようと頑張っているのは，決勝の相手・エジプトのラシュワン選手です。実はラシュワン選手，決勝の前にはやる気満々でした。ものすごく張りきっていました。もう，「勝つのは俺だ！」と確信しているような感じでした。彼の恩師，エジプトの監督は，日本人の山本という先生だったのですが，山本先生からはラシュワン選手に対して，「いいか。山下は足を怪我しているから何も出来ない。まず１分間，両腕を突っ張って山下の動きを封じろ。そしたら彼は何も出来ないから，必ず動揺が走る。１分過ぎたら思い切って攻めていけ。そしたらおまえの勝ちは決まったようなものだ。」こういうアドバイスをされていたらしいんです。しかし，彼は早く勝ちたかった。その１分間を待てなかったんですね。試合が始まったら，ガーっと私に向かってきて，思い切って技をかけてきました。彼が技をかけたときに，私がスっと足を開きさばいたら，なんと空振りして彼の技は空を切って勝手に倒れたんです。これは勝手に倒れた相手を一生懸命押さえ込もうとしている写真です。そして，彼が立ち上がれることはありませんでした。私は金メダリスト，28年前に優勝した話です。

実は中学２年生のときに，「将来の夢」という題の作文を書かされた中で，私は次のようなこ

とを書きました。「僕は柔道が大好きで，一生懸命柔道の稽古に励んで，柔道の強い高校，強い大学に行きたい。そして僕の夢は，柔道選手としてオリンピックに出場することだ。オリンピックに出場して，メインポールに日の丸を仰ぎ見ながら，君が代を聴けたら最高だろうなと思う。また，現役が終わった後は，柔道の素晴らしさを世界の人々に広げられるような，そんな仕事がしたい。」こんなことを作文に書いていました。オリンピックは，夢が現実になった瞬間でした。先ほど，過去は全部忘れてもいいといった話をしました。しかし，この瞬間だけは，あの思いだけは，一生忘れることはないと思います。私は，表彰台の一番高いところで思いました。「ああ，俺は世界で一番幸せな男なんじゃないかな。自分も一生懸命頑張ってきた。素晴らしい恩師とも出会った。しかし，オリンピックっていうのはそれだけで勝てるような，そんな簡単なものじゃない。私の周りにはたくさんの素晴らしい稽古仲間がいた。同級生や先輩・後輩。そして，私のこの夢の実現のために，多くの人が私を励まし支えてくれた。こういう思いがひとつとなって，私は金メダルを取れたんじゃないか。」そんな思いでいっぱいでした。

今から14～5年前，日本で最初の女性宇宙飛行士・向井千秋さんが母校に帰られて，高校生を前に講演をされたことがあり，その講演録を読んだことがございます。こんなことが書かれていました。「私はいろんな人から，『向井さん，あなたどうして宇宙に行けたの。あなたが宇宙飛行士になれた一番の大きな理由は何ですか。』こんな質問をされる。私が宇宙に行けたのはいろんな理由がある。その中で一つだけその理由をあげろと言われたら，私は迷わず次のことをあげたい。それは，私が高校生の頃，皆さんと同じ年代の時に，私は宇宙飛行士になりたいという夢を持った。そして，その夢を持ち続けてきた。これこそが，私が宇宙飛行士になれた一番の大きな理由じゃないかな。私はそういうふうに思っている。」そんなくだりがありました。「ああ，同じだ。そうだ，そうだ。夢を持つこと，持ち続けること。その実現を心から願うこと。このことなんだ。」と思いました。

しかし，残念ながら今の子どもたち，少年少女，若者たちは，そういう夢を持っているだろうかと思うのです。私の見知りする限りでは，今の子どもたちには，夢を持てない人が非常に多いような気がします。子どもたち・若者・少年少女に接するときには，いつもこの夢を持つことの大切さをお話しするのですが，時々「先生の話を聞いて，夢を持つことの大切さがわかった。でも，どうしたらその夢が持てるんでしょうか。」こんな質問も受けます。

子どもたちが夢を持てないのは，子どものせいだけではないと私は思っています。我々大人に，より大きな原因があるのではないかと思います。私たちが夢を持って生きないで，私たちが生きることの素晴らしさを子どもたちに伝えないで，愚痴や不平不満を子どもたちの前で言って，どうして子どもたちに夢がもてるんだろうかと思うのです。

私が小・中学生の頃の今から40年以上前，当時の我々生活ぶりをもし収録したものがあって見られるとしたら，たぶん我々はそれを見て，「ああ，これはまさに今の発展途上の国々と同じだな。」と思うかもしれません。しかし，その頃は誰もが夢を持っていました。夢があり，瞳が輝いていました。明るい笑顔がありました。子どもらしく生き生きと生きていたように思います。物質的に恵まれた今の時代よりも，私は当時の我々の方がより子どもらしく生き生きと生きられたんではないかとさえ思います。

子どもたちが夢を持って元気に，瞳を輝かせて，明るい笑顔で生きていく。そういう社会を創っ

ていく。これは我々全ての大人に課された課題ではないでしょうか。そして，そのために体育・スポーツが，何らかの役割を果たせるのではないのでしょうか。私はそう思っております。なんとか多くの体育人の力で，スポーツ人の力で，子どもたちが夢や希望をもてる，そういう時代を少しずつでも創っていきたいというのが，私の思いでございます。

この２枚のポスターは，2001年になって日本の柔道界でもう一度，柔道創始者・嘉納治五郎師範の理想の原点に立ち返り，柔道を通しての人づくり・人間教育を大事にしていこう。そういう柔道家に生まれ変わっていこうという，全日本柔道連盟と講道館の合同プロジェクト・柔道ルネッサンス委員会誕生で最初に作ったものです。私が委員長を務めております。

私は，バルセロナオリンピックが終わった後の1992年から，全日本柔道男子監督を引き受けました。そして，世界の強豪を相手に1996年のアトランタ，2000年のシドニー，という２つのオリンピックにおいて，日本チームを率いて闘ってきました。

アトランタオリンピックの頃から，日本の柔道人のマナーの悪さ，モラルの低下，これがいろんな形で表れてきました。例えば，柔道大会がある体育館だとか武道館の使い方が非常に悪い。インターハイや国体，全国持ち回りで開催する大会等においても，地元は一生懸命頑張って準備はしても，選手や監督・役員・関係者もなかなか決まりを守ってくれない。なかには，「もう柔道はいい。もう柔道の大会は開きたくない。」こんな声さえ出るような状況でした。

私は，当時日本において最も，柔道界の中で結果を求められる立場にありましたが，柔道界の偉い先生方に言っておりました。「柔道界はこれで良いんですか。柔道創始者・嘉納治五郎師範が目指したものは，人づくり・人間教育ではないのですか。勝つだけでいいんですか。」と。

2000年のシドニーオリンピックで私は全日本の監督を辞めました。2001年に先程の講道館と全日本柔道連盟合同プロジェクト「もう一度創始者の原点に立ち戻って，人づくり・人間教育の柔道界を目指していこう」を立ち上げたときに，私がその委員長に任ぜられたわけです。

私の好きな言葉に「伝統とは形を継承することを言わず。伝統とはその魂を，その精神を継承することを言う。」といった言葉があります。我々柔道人は，本当に嘉納師範が目指した柔道，このポスターにも書かれてありますように，「精力善用」，「自他共栄」って言葉がございます。これは嘉納治五郎師範が表した柔道の理念でございます。これを目指し，求めて，我々は柔道をやってきたのだろうか。勝ち負けや技だけを求めてきたのではないだろうか。そんな思いからこの運動はスタートしました。

私が全日本の監督を務めているとき，我々全日本柔道男子チームが目指したものは明確でした。我々が目指したのは，最強の選手づくりではなかったのです。我々が目指したのは，最高の選手づくりであり，ただ強いだけの選手はつくらないとの思いでした。

この特別プロジェクトは10年間で活動を終わりましたが，これからも嘉納治五郎師範が目指し

た柔道は何であったのか。どうして「柔の道」と名付けたのか。「道」とはいったい何なのか。そこのところを常に我々柔道人は心に留め，そして行動・実践していく必要があると考えております。

2006年から私，神奈川県の体育協会の会長を務めております。神奈川県では，歴代，知事が県体協の会長を務めておりました。ですから私の前任者は松澤知事でございます。知事が，東海大学湘南校舎の私の研究室に2回来られ，口説かれました。「私に代わって神奈川県体育協会の会長を務めてほしい。」と。その時の知事の話によりますと，知事になった瞬間に，あて職が何と263にもなったとのことでした。263のうちの一つが神奈川県体育協会の会長の職というわけです。松澤知事は大学時代は，ラグビーをやられており，ジョギングや短いマラソン等にも参加されていたスポーツマンです。「私は誰よりもスポーツの大切さ，スポーツの持つ価値，それをわかっているつもりだ。しかし，私の知事という立場でこの県体協の会長を務めていくことは無理がある。自分に代わってこの職に就いていただけないだろうか。」

最終的に，この知事からの要請を受けました。そして現在まで，神奈川県体育協会の会長を務めております。会長になって真っ先に取り組んだのが，スポーツを通した「いじめ防止活動」でした。前述した中学時代の恩師から，繰り返し教わったこと「柔道を通して学んだことを普段の生活，日常生活や人生で生かすことが道なんだ。道場で学んだことを普段の生活で実践していくことに価値があるんだ。」という教えを受けてきた私は，スポーツで最も大切なフェアプレイの精神を，普段の生活の中でスポーツ人が発揮していけば，何かを変えることが出来るのではないかと考えたのでした。

神奈川県では，中学校で6割弱，高校で4割5分弱の子どもたちが，部活を中心としたスポーツ活動に励んでおります。彼らが最も大切にしているフェアプレイの精神を，道場やグラウンド，コートだけではなく普段の生活で発揮していけば「いじめはなくなる」との思いであります。この写真は，加盟団体の代表者の方々に集まっていただき，私の考えや思いの理解を求め，取組を提案しているところでございます。

県の会長と言っても，神奈川県体育協会と言っても何の力もありません。しかしご承知のように，県体育協会には，ほとんどの競技団体が加盟しており，市町村にある体育協会には，市町村の競技団体・チームが加盟しているわけです。スポーツ少年団や，中体連・高体連も加入しています。ですから，我々本体に力はなくても，こうした加盟団体と一緒になって行動すれば，何かを変えられるのではないかという思いで，緊急集会を開いて提案をしたのでした。

その結果は，全員が賛成してくださいまして，「会長やろうよ！」ということで，神奈川県体育協会としての活動として展開することになりました。まず最初にポスターを作ろうということになり，「日常生活でもフェアプレイ」をモットーにしました。そして，このポスターを2万3千部作りました。全ての教育機関，交番，公民館，図書館，公の機関，県内を走る全てのバス路線，それからＪＲ，私鉄等々に貼らせていただき，活動を展開していったのでした。

1枚目のポスターだけは失敗でした。私がイメージとなっているのです。私より年輩の各競技団体，支所の体育協会代表の方々は，「いや，最初はやっぱり言い出しっぺの会長がならなきゃ！」と言われて，1枚目だけはそれに従わざるを得ませんでした。

私がイメージするのは，やはりターゲットは小学生・中学生・高校生。そういった彼らや彼女たちが憧れるようなポスターを作らなければいけないと考えていました。ポスターがパッと貼ってあったら，それを誰もいなかったらはがして家に持ち帰って自分の机の前に貼りたくなる。そんなポスターでなければならないとイメージしていたのです。毎年ポスターを作っていますが，だんだんと良いポスターができてきました。

ちょっとお見せしますが，これは中村俊介選手で，南アフリカのワールドカップの前年につくりました。おそらくワールドカップでは，中村俊介選手が大活躍するだろうと思って作り，友人の岡田武史さん（岡ちゃん）に間に入ってもらってお願いしました。

これは，巨人軍の原監督。ちょうど前回のＷＢＣで優勝し，ペナントレースでも日本シリーズも制覇した年にお願いしました。私の高校・大学の一つ後輩でございます。

これは杉山愛ちゃん。彼女が現役を引退した年のものです。男・男・男ときていましたので，彼女に協力してもらいました。昔，あるハムのメーカーの宣伝で一緒に出たことがありまして，そういう縁もフルに活用させていただきました。

これが去年のポスターでございます。今年のロンドンオリンピック，金メダルを取った内村航平選手です。ちょうどこのポスターができて貼り始めた10月半ばに，日本での世界体操選手権で，素晴らしい成績で優勝しているのです。

この10月，最近貼り始めたのが，なでしこジャパンの川島選手です。このポスターを神奈川県内に，２万３千枚くらい刷りまして，いろんな所に貼っております。

しかし，最も大切なことは，これを子どもたちに求めるだけではダメだということです。大変残念ながら，我々大人の社会でもパワーハラスメント，セクシャルハラスメント，いろいろことが起きております。お年寄りの世界でも陰湿ないじめがあると聞いています。少なくても子どもたちにこういうものを求める以上，まずは我々大人のスポーツ関係者が自らこれを実践すべきであると考えます。そして，こういう活動を展開していく上で何より大事なのは，現場の指導者の意識・姿勢ではなかろうかと思うのです。試合に勝つことだけを大事にする指導者から柔道を教わっていたら，今とは全く違った私が出来上がっていたかもしれません。

今から３年前には，神奈川県内でスポーツを通した「いじめ防止の標語」を募集しました。一番上に載っているのが全体の最優秀作品です。「光る汗　一緒に流せば　ほら仲間」この言葉を見たときに，私は脳裏にあることが浮かんできました。現在でも多くの子どもたちが学校に行けないでいる現状があり，友だちがいない子や，笑顔を忘れ心を閉ざしている子どもたちも多く存在するのです。こうした子どもたちに対して，スポーツをやっている子どもたちが，「ねえ，一緒に走らない。」「一緒にバレーやろうよ。」「テニスやらない。」と声をかけて，一緒にスポーツを勧める。そうした活動が展開していけないものかと考えました。いじめに関しては，残念ながら我々神奈川県体育協会の取組は甚だ不十分です。今までの活動によって，県内でいじめの数が減ってきたというデータは出ておりません。しかし，さらに取組を工夫・強化しながら，もう一歩踏み込んでいきたいと思っております。神奈川県内だけでやっても意味は薄く，なんとか神奈川で成功させて，これを日本全国に伝えていきたいと思っております。

この写真は，2006年に立ち上げた「ＮＰＯ法人 柔道教育ソリダリティー」であります。2009年から国税庁の認定になりました。「ソリダリティー」という言葉は，なかなか聞き慣れませんが，新渡戸稲造先生も著書「武士道」の中で，この「ソリダリティー」という言葉が使われております。「ソリダリティー」が一躍有名になったのは，ポーランドのワレサ議長，日本では連帯とされていますが，このワレサ議長が叫んだのが「ソリダリティー」なのです。ＩＯＣを中心として世界のスポーツ界でもよく使われております。「弱者とハンディを持った人と発展途上の国々の人と手を携えて一緒に活動していく」ときにこの言葉が使われます。「連帯とか団結とか結合」という意味でございます。

メインの活動の一つに，リサイクル柔道着の送付があります。主として，高校で体育の時間に柔道をやり，その後に柔道はもうやらないといった生徒たちが，柔道着を綺麗に自分のとこで洗ってきて，それを学校単位でまとめて，着払いで我々ＮＰＯの方に送っていただく。それを海外の国々に，柔道部の学生がボランティアとして仕分けして送っていくという，メインの活動です。

それ以外にも，指導者や学生のボランティアを海外に派遣したり，海外から指導者や選手を受け入れたり，一部の事例として，まだ使える畳の提供をいただき，入れ替えをしたり送付したりするという活動を展開しております。

現在世界では，約200の国々が国際柔道連盟に加盟しておりますが，半分くらいの国は非常に貧しい状況の貧困国です。ですから，なかなか柔道着を買うお金がなく，日本人から見たら信じられないことですが，短パン・Ｔシャツで柔道らしきものをやっていることがあるのです。砂場とか草むらで柔道をやっていることを見るのも珍しくありません。また，これも日本では信じられませんが，一着の柔道着を子どもたちがまわして着ている国もあります。日本で考えますと極めて不衛生となります。

この８月・９月の夏休みの時間に，学生ボランティアとして，ミャンマーに東海大学の柔道部の学生二人を，ボランティア指導員として１ヶ月間派遣しました。ミャンマーのナショナルチームの選手達と寝食を共にしながら一緒に稽古しながら柔道の指導にあたったのですが，この二人の学生がまず最初に驚いたのが柔道着だったんです。日本では毎回使うたびに必ず柔道着を洗濯します。少しでも汗の匂いがあると，稽古する相手に失礼であるということからです。ミャンマーのナショナルチームの選手たちは，みんな持っている柔道着は１着なのだそうです。ですから，１日１回の練習でも２回の練習でも，毎回同じ物を着ることになるのです。最初は驚き違和感をもったようですが，１週間たったら慣れたそうです。１週間使って，日曜日の休みの時に，足で踏みながら柔道着を水洗いする。うちの柔道部の学生も同じようにしてきたことですが，慣れてくると最後は全く抵抗がなかったと言っていましたが，これが世界の現状なのです。

他にも教材を作ったりと，さまざまな活動を展開していますが，こうした支援は実は表の顔でして，本当の目的というのは，活動を通しながら柔の心，和の心，日本の心，これを世界に伝えていくことを考えているのです。少し考えていただきたいのですが，外国の人が柔道着を着て畳の上に立つだけでも，これは立派な日本伝統文化の体験になるのです。柔道着は着物であり，着物を着て帯を締めるのです。欧米の女性ですと，裸足になることには抵抗がありますが，裸足で畳の上に立ち，日本式の正座をして座礼をする。そして，ここで使う言葉は日本語。それだけで立派に伝統文化の体験になっていくのです。

私もさまざまな国々を訪れたことがありますが，現地に行って柔道の指導を求められるときには，必ず柔道の講演も行うようにしています。普及のメインは，柔らの心を世界に伝えていくことと考えているからです。

どんな短い講演でも，必ず話すことが二つございます。一つは，「柔道において最も大切なことは，闘う相手に対しての敬意・尊敬の気持ちをもつことだ。柔道では闘う相手は敵ではない。」ということです。相手がいるから，自分を磨き高めることが出来る。自分が成長するための，相手っていうのは貴重なパートナーなのです。その相手に対しての敬意・尊敬の気持ちをもつことが非常に大事であり，この日本式の表し方が「お辞儀」である。ですから柔道では，柔道を始める前に「よろしくお願いします。」終わった後は「ありがとうございました。」この礼が大切なのだということを教えるのです。

ご存知の方もおられるかもしれませんけど，イスラムの国では，基本的にアッラーの神以外には頭は下げません。ですから，柔道の初心者はこの日本式の礼をすることに対して，非常に抵抗を感じるそうです。ですが，どうしてもしなきゃいけないって言うと，腰だけ曲げて頭下げない礼をするのです。しかし，だんだん稽古を重ねるに連れて，彼らも理解していきます。柔道でのこの礼は，アッラーの神の前にひれ伏すのとは違うんだ。相手に対しての感謝・尊敬の気持ちの表し方なんだとの理解で，きちっとした礼が，経験を積めば積むほど出来るようになるのです。

二つ目は，柔らの道についてです。道とは何か。先ほどからお話ししていますが，柔道創始者・嘉納治五郎師範が目指したものは，「柔道を通して心身を磨き高め，そのことを日常生活・社会生活の中で実践し，よりよい社会を作っていく，そこにある。」という小手です。

「私は柔道世界チャンピオン，世界のトップになったけれども，それだけでは真の柔道家とはいえないんだ。本当の柔道家というものは，そうやって柔道を通して培ったものを普段の生活で生かしていく，それができて初めて真の柔道家といえるんだ。大事なことは柔道を通して体得したこと，学んだことを日常生活や人生で実践することだ。」この思いを必ず伝えるようにしているのです。

これは，2010年に中国南京に外務省と協力で建てた，「日中友好南京柔道館」の開館式の写真でございます。２年前の３月に建てました。2007年に青島に，「日中友好青島柔道館」を外務省と協力して立ち上げました。この建物を通しながら，柔道を通した草の根交流，臨界外交を展開していこうと考えたのです。どちらの柔道館も指導者は，我々ＮＰＯで招聘して，半年間日本で勉強してもらい，その後に現地で指導していただいております。外国から指導者を受けるときには，必ず柔道だけではなく，日本語や日本の文化といったものに出来るだけ触れさせるようにしています。日本の伝統文化を，日本の心を理解して，日本とその国の架け橋になってもらいたいという思いでおります。その思いで隣国の中国と交流をしております。

これは，2005年に，今回大統領に返り咲きましたプーチンロシア大統領が，大統領として2005年の11月に日本に来られたときに一緒に撮った写真でございます。私の一番大切な宝物を大統領にこの場でプレゼントしました。この写真を撮った時には，世界中のマスコミが約100名くらいいたのですが，ここで私は，この嘉納治五郎師範が書かれた「自他共栄」という書を示しながら，「日本とロシアがともに協力しながら，発展することを願って大統領にプレゼントします。」と言って大統領にお渡ししました。大統領は若いときに，柔道家としてかなり柔道に励んでおり，「柔道は単なるスポーツじゃない。柔道は哲学だ。柔道を通して学んだことが自分の人生に生きている。あるいは自分の人生を変えた。」そこまではっきり言うような方なのです。

この書をお渡ししたときの，大統領からの言葉が大変面白かったです。大統領はちょっとびっくりされました。出てきた言葉が「これは本物ですか。コピーですか。」でした。私はちょっと胸を張って「これは本物でございます。」と言うと，大変びっくりされて，「これは僕だけのものにはできない。これは皆の財産にしなきゃいけない。」と言われました。実は，この書については，私の恩師・佐藤宣践先生が「この書は俺が持ってるより，おまえが持っていた方がずっとふさわしい。おまえにあげる。」と言って，私にくださった書でありました。先生のご了解を得て，これを大統領にプレゼントしたわけです。

その後，帰られてからすぐに手紙がきました。「ロシアに来てほしい。そして，山下さんと一緒に柔道着を着て子どもたちに指導しているところをＤＶＤで収録したい。それをロシアの柔道の普及に繋げたい。よかったら柔道着を持ってロシアに来てくれませんか。あなたも私も少し年を取ってきた。だから，できれば若い選手を連れてきてくれると，なお有り難い。」という内容でした。

この写真は柔道教室が終わって，一緒に握手をしようとしているところの写真ですが，真ん中に写っているのが私の教え子で，シドニーオリンピックの金メダリスト・井上康生であります。この後，一緒に食事に行きました。６～７名の少ない人数での食事会だったのですが，大統領がまず初めに，ワインを片手に持ってスピーチを始めました。「山下さん，日本とロシアとの間には前々から難しい問題がありますね。しかし，この問題以外に何の問題も存在しない。これ以外の問題を作ろうという気持ちもない。だから何も心配しないでください。安心してください。」そして，そこで一度グラスを置きました。「この難しい問題も，両国が知恵を絞って解決できれば，日露の間に何の問題も存在しなくなる。さあ，乾杯しましょう。」

大統領の隣に座って，終始笑顔で一言も喋らずにいた，次の大統領になった当時の第一副首相・ガスプロム会長のメドヴェージェフさんが，「乾杯！」と言ったときに，その向こうに私をずっと育ててくれた東海大学創設者・松前重義先生が微笑んでいる写真が見に入ってきました。

2005年でしたか，北オセチア・ベスランでテロによって300人以上の子どもたちが亡くなったときに立った新しい柔道場の写真でした。ここに我々ＮＰＯの方で，畳と柔道着を寄贈しました。そして，この北オセチア・ベスラン，非常に柔道の盛んな地域ですが，ここの子どもたちも日本に招聘しました。ちょうどその写真の１ヶ月後でした。

大統領とこの時お会いして，大統領から出た最初の言葉が「山下さん，テロで傷ついたロシアの子どもたちを，柔道の交流を通して励ましてくれる計画が進んでいると聞いております。ロシア国民を代表して，その行為に対して，心から感謝とお礼を申し上げたい。」これが，大統領の第一声でした。まだやっていない，１ヶ月後に行う計画ですが，「なんでこんなことまで知って

いるのか。」と思いました。後からわかったのが，強面の大統領，大統領が喜ぶ話だと，こんな小さな話でも，全部大統領まで伝わるんですね。ですから，私が日露の草の根交流でやっていることということは，ほとんど全部，大統領の耳に入っていたのでありました。

中国もロシアも決して今は発展途上の国ではない。しかし，隣国の巨大な国です。ですから，そういう意味では相互理解を深めるための柔道を通した交流，私は意味があると思っております。

最後になりますが，私と井上康生で３年前にはイスラエルとパレスチナも訪問しました。二つの国で，ナショナルチームや指導者たちを集めて，講演や柔道指導を行いましたが，最後にイスラエルとパレスチナの子どもたちを両方一緒にエルサレムに集めて，柔道教室を開きました。ＮＨＫが同行して，これを番組で放送してくれました。この時，ＮＨＫのプロデューサーの方が，私に「山下先生，できればちょっと，イスラエルとパレスチナの子が一緒に組んでいる場面が撮れれば大変いいんですけどねえ。」そう言われました。私は人間がまだ出来ていないものですから，「そんな無茶なこと言うんですか。両方の国の子どもたちが同じマットの上に立つだけでも大変なのに，そんなこと言うもんじゃないですよ。」と言ったら，「あ，あ，どうも失礼しました。」となったのですが，パッと，私とＮＨＫの人が振り向いて見ると，何と両国の子ども二人が組んで乱取りを始めていたのでした。左側の短パンの方がパレスチナの子どもで，オレンジ色の帯を締めているのがイスラエルの子です。とても心配しました。どう見ても，イスラエルの子どもの方（上下柔道着）の力が上なのです。まず，イスラエルの子が，ポンとパレスチナの子を投げました。ハッとしました。どうしようと。そうした後になんと，次にパレスチナの子どもが技をかけたときに，イスラエルの子どもが見事に飛んであげたんですね。それを見て，なんか胸が熱くなりました。お互いにお互いのことなんか絶対信じられない。憎悪が非常に入り組んだ難しい関係なのです。でも，そんな子どもたちでも柔の心を理解してくれているのかなあと思いました。その後，両国の中学生を一緒に日本に受け入れました。一昨年の12月です。２週間両国の指導者も含め一緒に行動しました。昨年の12月にも１ヶ月間受け入れて，一緒に日本で研修してもらいました。両国は，どちらもエルサレムの出身で，車で10分かからないところに住んでいるのですが，その時は，「帰ったら少しお互いに交流しようか。」そんな信じられないような会話も交わされました。また，今年の12月に１ヶ月間，イスラエルとパレスチナの子どもたちを招聘するつもりです。

少々時間がオーバーしております。最後になりますが，私は今の日本は病んでいると思っています。毎年自殺者が３万人以上おり，これは極めて異常な惰な現状です。膨大な医療費の負担も日本の財政を圧迫しております。90年代から精神的な異常を訴える人が非常に増えてきています。若者のコミュニケーション能力の不足も深刻な状況です。大人においても，心の健康の不安を訴える人が非常に増えてきております。

病んでいる日本に対して，私は，大人も子どももお年寄りも，一人一人が人間らしく輝いていくために，単に柔道・武道だけではなく，スポーツ・体育，これが果たせる役割というものがあるのではないかと思うのです。そして，もし現場で体育の授業に携わる人たちの意識が高まっていけば，単にスポーツをやっている人間だけではなく，全ての子どもたちが必修で行う体育の授業の中で，相手を思いやったり，ルールを守ったり，自分を律したり，力を合わせたり，そうい

うことが守られていけば，子どもたち一人一人がより輝きを増すことが不可能ではないと思っています。

明日は分科会ですね。公開授業等が展開されると聞いております。学校体育を通して，より子どもたちが子どもらしく，明るい笑顔で生き生きと生きていくという社会が開かれていくことに繋がるような分科会が展開されることを心から願っております。

まとまりのない話になりましたが，最後まで熱心にお聞きいただいたことに心から感謝・お礼を申し上げたいと思っております。

そして，この全国学校体育研究大会が，ますます盛んになり，そこでの発表・議論が現場に生かされ，現場での体育の授業がより活性化され，実り大きなものになることを心から願いまして，私の講演を終わらせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。